東南アジア研究　21巻1号　1983年6月

ベトナムの「まち」
——特に「くに」との関連を中心として——

白　石　昌　也*

Vietnamese Cities and the State in the Pre-modern Era

Masaya SHIRAISHI*

This essay discusses Vietnamese cities in the pre-modern era, especially their political significance to the rulers of state who built them. The first section takes issue with the assertion made by certain scholars that the urban genesis in Vietnam was nothing but the product of the Chinese colonization, and attempts to demonstrate that Vietnamese cities were the outcome of the internal development of the indigenous society. The second section, which focuses on various tales on the guardian spirits of the Thăng Long capital cited in Sino-Vietnamese documents, further supports this point. The third section discusses the political significance of the walled cities and the city walls built by the rulers of independent Vietnam.

The fourth section argues that cities had two functions. Generally speaking Vietnamese cities consisted of two parts: political and ritual centers fortified by walls; and surrounding quarters where commoners engaged in commercial and productive activities. Although the state rulers tried to control the outer parts of the cities, the economic activities conducted there by the common people should be regarded as the outcome and a reflection of the economic development in Vietnamese society as a whole, particularly in the rural areas.

はじめに

「古典的な都市の第一の標識は都市を囲んでいる城壁にある」と，大室幹雄氏［1981：4］は指摘する。この指摘はベトナムにおいても例外ではない。ベトナムにおける城壁都市，これが本稿の主題である。

城壁の建設は政治権力の存在を前提とする。城壁の存在は，そこに守るべき政治権力が内包されていることを意味し，また政治権力の介在をもってしてはじめてその建設は可能となる。城壁の建設と経営は，政治権力者にとっての一大事業である。城壁の存在は，国家の意思を反映し，また象徴する。

しかしながら都市は，政治権力者と彼らの営む政治的・儀礼的機能のみによって構成されているものではない。都市にはまた，政治権力者が支配の対象とみなしている一般庶民が生活し，生産活動や商業活動に従事している。都市の生成と発展について論ずるためには，都市の持つ政治的機能と経済的機能の双方に着目し，その両側面から検討を加える必要があるであろう。しかし，その両側面を木

* 大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科；Thai &Vietnamese Department, Osaka University of Foreign Studies, 2734 Aomadani, Minoo City, Osaka 562, Japan

稿において等分に扱うためには，与えられた紙幅の制限と，また何よりも筆者の準備不足からして，とうてい望むべくもない。したがって本稿においては，ベトナムにおける「まち」を「くに」との関連において捉えることに重点をおくこととしたい。

I

大室氏は，ベトナム北部を含めた東アジアにおける城壁都市の出現を，「シナ化と都市化と植民地化との三位一体の歴史現象」として捉える［同上書：13］。すなわち城壁都市の出現は，漢－シナ人（Han-Chinese）による植民地化（colonization）の具象的な表現にほかならず，その植民地化の過程とは，とりもなおさず非「中国」的な地域のシナ化（cinisization）の過程にほかならない。ゆえに，シナ化とは端的にいって都市化（urbanization）のことであると論ずる［同上書：12-17］。

フィートリー氏のベトナムにおける都市の発生（urban genesis）の議論も，以上のような大室氏の見解と発想を同じくする。フィートリー氏は，東南アジアにおける都市の発生を2類型にわけ，それぞれを urban imposition および urban generation と呼ぶ。前者はベトナムにみられるもので，中華帝国の版図の拡張によって，中国式の植民地都市が形成されたとみなす。後者は他の東南アジア地域，すなわちインド化した地域（Indianized realms）にみられるもので，それぞれの社会の内在的な発展と階層化の延長上に都市の発生があったとみなす［Wheatley 1979：288-289］。ここでは，ベトナムの都市は，中国による征服，中国による植民地都市の形成，外部からの中国化の強制の過程に発生したものと了解され，他地域のインド化した都市類型と対比されている。このようなフィートリー氏の見解は，明らかにセデス氏の有名なテーゼを継承し，それを都市発生の問題に適用した議論にほかならない。すなわち，セデス氏は，中国化とインド化とを対比的に捉え，前者は中華帝国による領土的・政治的な支配の結果であり，後者はより平和的・間接的な文化的浸透と受容の結果であるとみなすのである［Coedès 1968：34-35；セデス 1980：58-59，60］。

だが，このような議論は，果たして妥当なものとみなしてよいのであろうか。

中国のベトナム支配は，通常，紀元前111年の漢武帝による南越攻略をもって開始されたとされている［片倉；吉沢 1977：54］。無論南越自体は，広東に本拠をおく中国人の独立王国であったのだから，南越のベトナム支配（207 B.C.）をもって，中国支配の嚆矢とする解釈もなりたつであろう。事実フィートリー氏［Wheatley 1979：292］は，南越による Lac（雒）tribes の支配と城砦都市の建設をもって，ベトナムにおける都市発生の端緒とみなしている。だが，デーヴィッドソン氏も指摘するごとく［Davidson 1979］，この南越の支配以前に，すでにベトナムの紅河流域には独自の国家が形成されていたのである。それは雄王の文郎国（？-258 B.C.）と安陽王の甌貉国（257-208 B.C.）である。

国家の形成を首都の建設と結びつけて考えるのは，現代の研究者に限られたことではない。潘輝注は1821年に完成した『歴朝憲章類誌』［巻1：輿地誌］の中で，「我越自雄王立國，分界建都」と述べている。雄王の建国に関して同書［同所］は，「雄王建國，號文郎國，都峯洲（中略），分國爲十五部（原文では十五都とあるが，これは誤とすべきであろう）（中略），王所居曰文郎國」と記し，『大越史記全書』［外紀巻1：鴻厖紀雄王］は「雄王之立也，建國號文郎國（中略），分國

爲十五部（中略），其曰文郎，王所都也」と記す。ただし，文郎国の首都に関しては，その位置や規模などについての具体的な記述はなく，またその遺跡が発掘されたとの報告も未だない。その首都が城塁を建設したか否かも不明である［Lê Tương; Nguyễn Lộc 1979］。

次の安陽王に関して『歴朝憲章類誌』［巻1：輿地誌］は，「安陽王既滅雄王，改國號曰甌貉（中略），都封溪，今古螺城」とし，『大越史記全書』［外紀巻1：蜀紀］は，「王既併文郎國，改國號曰甌貉。（中略）王於是築城于越裳，廣千丈盤旋如螺形，故號螺城，又名思龍城。唐人呼曰崑崙城，謂其城最高也」と記す。この古螺（Cổ Loa）城の遺跡は発掘されており，その実在と形状，規模が確認されている。その位置は，現在のハノイ市，かつてのフクイェン（Phúc Yen）省に属するドンアィン（Đông Anh）県である［Ngô Thế Thịnh 1979; Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977: 14ff.; Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam 1971: 69ff.］。[1]

ここで注目すべきなのは，少なくとも南越支配以前の安陽王の時代には，すでに都に「城」が築かれていたことである。安陽王の時代の国家は部族連合国家の域を出なかったであろうから［片倉；吉沢 1977: 51-53］，そこにあった城壁都市も，性格的には中国の殷時代の都市国家に類したものであったろう。また，安陽王の都市国家が，中国化した支配者をいただき，中国的な都市の要素を多少なりとも備えていた可能性は強い。しかし，ここにおける城壁都市の発生が，中国による直接的な支配以前にみられることは否定し難い。また，たとえそこに中国化の形跡が認められたとしても，その中国化の現象は，セデス氏のテーゼにいうがごとき，中国による支配→植民地化を伴うものであったわけではない。ベトナムにおける城壁都市の発生と中国化という現象は，ベトナム以外の東南アジア地域における都市の発生形態，すなわち urban generation やインド化の過程と，さほど事情が異なっているとは思われないのである。

この点は，1,000年に及ぶ中国の政治的支配ののちに成立したベトナムの諸王朝の都市建設に関しても，事情は同じであると思われる。無論中国支配期に，中国の諸王朝が交州支配のための拠点をおき，それが城砦の形態をとったことは事実である。前漢は交州の治所を龍編（Long Biên）[2] においた。後漢期になると，[3] 徵姉妹の反乱（40-43年）を鎮圧した中国人高官馬援は，乱平定後，西于県を二分して，そのうちのひとつの封溪県に「麊江城」を築いたが，その名のいわれは城の形状が「圓如麊」であったことによるという

1）三重の土塁に囲まれ，その総延長は 16 km 以上に達する。遺跡の復原図は Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam［1971: 71］。桜井［1979: 26］に再録。

2）龍編の位置には諸説があるが，桜井由躬雄氏［1979: 27-28］の考証によれば，ハノイ東北方 20 km 余の安豊県（すなわち現在の Hà Bắc 省 Yên Phong 県）説をとるのが妥当である。

3）『大越史記全書』［外紀巻3：屬西漢紀］には，前漢期の治所は龍編，後漢期は麓冷（Mê Linh）におかれたとある。麓冷には前111年から後30年まで交州内の一郡たる交趾郡の治所がおかれ［Đinh Văn Nhật 1980a: 35］，また40-43年に反乱をおこした徵姉妹がここに都をおいた。その位置についても諸説があり，桜井氏［1979: 12-18］は山西省安朗県，すなわち現在の Vĩnh Phú 省 Mê Linh 県［Hoàng Đạo Thúy 1976: 118, 132］とするが，ディン・ヴァン・ニャト氏［Đinh Văn Nhật 1980a; 1980b］は，これに対して Trang Cổ Lôi（現在のハノイ郊外 Thạch Thất 県 Tân Xã 社）説をとる。また同氏［1980b: 43ff.］によれば，この地域には古くより雒将・雒侯の城塁がある。かつまた徵姉妹の王宮と比定される地点の南方には Nam Giao という名の村（làng）があり，徵姉妹が南郊壇を設けた可能性の大きいことを示唆しているとする。

[大越史記全書　外紀巻3：漢建武九年]。ここに，中国人支配者が県レベルに「城」を築き，ベトナム人の反乱に備えたことが看取できる。現在のハノイの地にあたる宋平に交州の治所がおかれるようになったのは，隋支配期の6～7世紀ごろのことであったという[桜井　1976: 159; Trần Huy Liệu　1960: 13; Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977]。『大越史記全書』[外紀巻5：唐武徳元年]によれば，唐代の621年には「子城」が築かれた。これはハノイの蘇瀝（Tô Lịch）江岸にたてられたという[Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long　1977: 16]。ついで767年には唐の経略使張伯儀が「羅城」を築いたことが，『大越史記全書』[外紀巻5：唐大歴二年]にみえている。子城，羅城の原義は，それぞれ，前者が重要機関を囲繞する小規模の城壁，後者がそれをとり巻く外側の城壁の意であるのだから[曾我部　1976: 241-242]，767年になって城壁が二重となったことを示唆するとみてよいかもしれない。羅城は791年に補強されたらしい[Trần Huy Liệu　1960: 14]。さらに808年には交州都護張舟が「大羅城を増築」したと『大越史記全書』[外紀巻5：唐元和三年]にあり，補強が重ねて行われたことが窺えるとともに，この時までには「大羅城」という呼称が用いられていたらしいこともわかる。864年高駢は，860年にハノイを攻略した南詔軍（雲南より南下）を征討するために「都護總管經畧招討使」に任ぜられ，その任務を果たした。866年捷報に接した唐の皇帝は，交州に静海軍をおき，初代の節度使に高駢を任命した。高駢は「羅城」を再建した[同上書：唐咸通五年，六年，七年]。

このようにして中国服属期のベトナムに，中国人支配者が城砦ないしは城壁都市を建設したことは，争われぬ事実である。しかし，唐滅亡（907年）後，政治的独立＝建国を再度かちとったベトナムの土着支配者層は，このような中国服属期の城壁都市を，そのまま継承したとみなしてよいのであろうか。中国の南漢の攻略軍を打破して939年自立し王を自称した呉権は，螺城に都している[同上書：呉紀]。彼がその都を，中国諸王朝に服属する以前のベトナム独立支配者の故地においた一事は重要であると思われる。ついで十二使君の群雄割拠を平定して，967年はじめて帝を名乗った丁部領，すなわち丁先皇は，華閭に都している。『大越史記全書』[本紀巻1：丁紀元年]には，「帝即位，建國號大瞿越，徙京邑于華閭洞，肇新都，築城鑿池，起宮殿，制朝儀」とある。華閭（Hoa Lư）はニンビン（Ninh Bình）省，現在のHà Nam Ninh省Gia Viên県，すなわち紅河デルタ最南端沿いの丘陵周辺に位置する[桜井　1980: 619 地図，621-625; Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam　1971: 144]。丁氏，さらにそれを継いだ黎氏（前黎朝）の短命な政権は，ともにここに都をおいた。この2王朝の故都について『大南一統志』[寧平省：古蹟]には，「丁黎故都，在嘉遠懸西北（中略），有内城外城，及石閘，東橋，壓橋，夢橋，前場，塔（ママ）寺，一柱寺諸名号，故址尚存」云々とあり，そこには内城，外城が備わっており，かなり本格的な都城建設の行われたらしいことを伝えている。このようにして，呉氏，丁氏，（前）黎氏などの独立ベトナムの最初の諸王朝が，中国支配期以前の独立ベトナム王国の故都に都をおいたり，あるいは全く新たな土地に都を新設したことは，注目に値する。10世紀のベトナム土着支配者層が，中国人支配者の城砦をそのまま継承しなかったことは，明白である。

しかし，1010年ベトナム最初の永続王朝を築いた李公蘊すなわち李太祖は，都を狭隘辺境の華閭から，「高王の故都」たる「大羅城」に移し，昇龍城と命名した[大越史記全書

本紀巻2：李紀一順天元年]。「高王」とは唐代の節度使高駢のことである。しかし，このことも，李太祖が，唐の中国人支配者が建設した城砦をそのまま引き継いだことを意味するのでは，決してない。李太祖による遷都の時には，かつての唐代の城塁はすでに失われていた，とチャン・フイ・リェウ氏は論ずる[Trần Huy Liệu 1960: 18]。李太祖が，独立ベトナムの首都にふさわしい都城建設に新たに着手したことは，記録の上からも確認できる。すなわち彼は，遷都の年に，昇龍京城のうちに諸宮殿をたてる詔を発した。それは「視朝之所」としての乾元殿を中心に，集賢殿，講武殿，それらの後方の皇帝の寝所たる龍安，龍瑞の2殿，さらに宮女の居所たる翠華，龍瑞の2宮などであり，また城内外に寺院をも建立した［大越史記全書　本紀巻2：李紀一順天元年]。つまり，皇帝や宮女の居所や，政治・儀礼のための中核の建築に，まず手がつけられたのである。ついで即位5年目の1014年冬10月の項［同上書：順天五年］には，「築昇龍京四圍土城」とあり，京城，すなわち首都全体を囲繞する土城の築かれたことが窺われる。この土城は，その後たびたび修築の手が加えられた。すなわち，1024年の項［同上書：順天十五年］には「修治昇龍京城」とあり，また李朝4代仁宗期の1074年の項［同上書　本紀巻3：李紀二英武昭勝三年］には「修治大羅城」などとある。

このようにして，李朝は隋・唐代の中国人支配者の植民地経営の中心地に都をおいたが，そのことは中国支配期の城砦をそのまま継承したことを意味するのではなく，独立ベトナムにふさわしい都城を全く新たに建設したことがわかるのである。なお，首都の中核部分に関しては，李朝2代太宗の1029年に大改築が行われ，その周囲に城一重を築いて龍城と名づけ，またその東方に長春殿，またその翌年には長春殿に隣接して，聴政のための天慶殿を築き，一層の整備がなされた［同上書　本紀巻2：李紀一天成二年，三年］。また京城の区域に関しても，太宗期の1035年に「創立西街市」[4]とあり［同上書：通瑞二年］，市街区の整備も並行して行われている。

李朝の建設した昇龍城は，1225年李氏から帝位を奪って新王朝をたてた陳朝（-1400年）によっても継承された。陳朝は1230年に城内に宮殿を増築した［同上書　本紀巻5：陳紀一建中六年］ほかには，さほど目立った改築の手を加えていない［桜井　1976：160]。1400年陳氏の政権を簒奪した胡李犛は，それに先だって1397年陳朝の皇帝に逼って，都を自分の出身地の清化府に移している。短命な胡氏政権は，中国の明軍の侵略の前に瓦解する。しかし，明の20年にわたる支配（1407-1427年）に終止符を打った黎利（黎太祖）は，1428年首都を再び昇龍に移している。黎朝は，宮城の東方に東宮を増築したものの[Hoàng Đạo Thúy 1974: 10]，基本的には李・陳朝の諸王宮を引き継いでいる。このようにして昇龍は，胡氏の簒奪期間と明の支配期を除いて（ただし，明もそのベトナム支配の中心地をハノイにおいた），李・陳・黎の3王朝にわたって独立ベトナムの帝都として，時の権力者の栄枯盛衰を目撃し続けたのである。

以上要するに，10世紀に中国の政治的支配から独立したベトナムは，中国の植民地経営の牙城をそのまま継承したのではなく，独立ベトナムにふさわしい独自の都城建設を心掛けたのである。また，中国人支配者の城砦との間には明白な断絶が存在する一方で，前黎朝は丁朝の華閭を継承し，陳・黎2朝は李朝

4) 李太宗通瑞2年11月の項に「帝御天慶殿，訊胡氏，阮慶獄。並切肉剉骨于西市」とある［大越史記全書　本紀巻2：通瑞二年］ので，「西市」とも呼ばれていたのであろう。なお，市での公開処刑は，古代の中国でもしばしば行われている。

の昇龍を受け継ぐといったように，ベトナム独立諸王朝間の都城経営には，明白な連続性が存在したのである。

無論独立ベトナムの諸王朝が建設し，経営した都城は，中国の都城建設のパターンにならうものであったろう。1397年胡（黎）季犛によって清化省安孫洞に建設された西都城にしても，「築城，鑿池，立廟社，開街巷」という手順を踏み［大越史記全書　本紀巻8：陳紀四光泰十年］，またその城外に土を築き羅城となした［大南一統志　清化省：古蹟胡城］ことにかわりはない。しかし，ここにみられる中国化とは，1,000年にわたる中国支配がおしつけた文化的帝国主義の結果であるとみなすよりも，独立ベトナムの統治者が，自己の目的と意図を実現するために，積極的に中国式の文物を採用（しかも主体的に取捨選択）した結果であるとみなすべきであろう。事情は，日本の支配者が平城京や平安京を建設するにあたって，中国の制度を自主的に採用したことと，さほど異なっているとは思われないのである。またインド化した東南アジア各地の支配者の首都の建設プランが，インド的な宇宙観と様式に沿ったものであったのと，大差があるとは思われないのである。

II

李太祖の新設した昇龍城と，唐代の中国人支配者の建設した大羅城との間の，微妙ではあるが，恐らくは本質的な断絶性は，その城隍神（都市守護神）にまつわる説話の中に，象徴的に示されているように思われる。

李太祖が1010年に昇龍に各種の宮殿を建設した際，同時に城隍神を祭ったことは，『大越史記全書』［本紀巻2：順天元年］に「治城隍」と記されていることからも確認できる。

この城隍神の起源については，もともと2種の伝承があったらしい。ひとつは龍肚伝承であり，いまひとつは蘇瀝江神の伝承である。昇龍城の守護神は宮城内の濃（Nùng）山に祭られた［Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long　1977: 15, 19］が，その位置は乾元殿の真北，すなわち宮城の南北に走る中心軸の北端に位置する［Vietnamese Studies 1977: 巻末地図］。『大南一統志』［河内省：山川濃山］によれば，この濃山は別名を「龍肚山」といい，そのいわれは「古傳山中有一孔，乃是山澤通氣，故号竜肚」であったからだという。すなわち，地中と気を通ずる深孔を龍肚と称したのである［Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long　1977: 15］。また15世紀に編纂された『嶺南摭怪傳』の「龍度王氣傳」によれば，李太祖が城を建立した時に，龍度王が神人となって夢枕にたったので，これを「昇龍城隍大王」に封じたという。「龍度」（Long Độ）は「龍肚」（Long Đỗ）に通ずるとみなしてよいであろう。龍度に関しては，13世紀ごろに編纂された『越甸幽靈集』の中にも「廣利聖佑威濟孚應大王」（以下「廣利」）の説話としても記載されているが，これについては後述する。

もうひとつのタイプの城隍神の起源，蘇瀝江神については，『越甸幽靈集』の「保國顯靈定邦國都城隍大王」（以下「保國」）によれば，かつて姓を蘇，名を歴という人物が住んでいた。彼は唐代に中国人支配者によって城隍神に奉られ，李太祖の遷都に際しては，その夢枕にたったので，「國都昇龍城隍大王」に封ぜられたという。ただし，この説話にあって蘇歴は，もともと龍度令であって小江岸上の龍度郷[5]に住んでいたとされ，すでに龍

5) 龍度は蘇瀝江両岸の集落の古名でもあったという［Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977: 15］。郷は村落にあたる［桜井　1975: 28］。しかし『越甸幽靈集』「開元威顯隆著忠武大王」の説話には「……安遠村。其村夾竜度慈

度（肚）伝承との一体化がなされている。また『嶺南摭怪傳』の「蘇瀝江傳」[6]においては，唐の都護高駢が羅城を築いた時に，紅河に流入する小江上で姓を蘇，名を瀝という神人に出会ったので，その小江を蘇瀝江と名づけ，また夢の中でその神人が「我是龍肚之精，地靈之長」であると告げたという。ここでも龍肚伝承との一体化がなされている。

このようにしてハノイの城隍神は，龍肚の精，すなわち地中と気を通ずる地霊，山霊としての属性と，蘇瀝江神，すなわちハノイの城の北西を流れて紅河に流入する小江の江神としての属性が合体したものである。この城隍神と中国人支配者の関係について，『越甸幽靈集』の「保國」によれば，すでに唐の李喜元[7]の遷府，高駢の大羅城建設にあたって城隍神に奉られており，李太祖の遷都時にはじめて祭られたのではないということになる。つまりハノイ城隍神はすでに中国人支配者によって祭られており，李太祖はそれを単に継承しただけであったとの解釈もなりたつ。しかし，ここで注目したいのは，唐代の支配者と城隍神との関係を友好的（ないしは中立的）に描いているのは，むしろ例外であって，他の伝承はいずれも両者の関係を対立的なものとして扱っていることである。

例えば『嶺南摭怪傳』の「蘇瀝江傳」によれば，高駢は蘇瀝江神の出現に驚いて壇を設け，また金銀銅鉄をもって符となし，3昼夜の誦呪ののちに符を地中に埋めて江神を鎮めようとした。しかし，その夜雷電が轟発し大風雨がおこり，符のことごとくが地表に露出して灰燼に帰し飛散した。[8] 高駢はこれをみて，この地には霊異の神がおり，長くとどまれば凶禍を招く，早く北（中国）に帰るべきだと嘆じたという。事実，彼は中国に召還されたのち，殺害されるという凶禍にあった，と伝承の記述者はつけ加える。『嶺南摭怪傳』の「龍度王氣傳」と『越甸幽靈集』の「廣利」の内容は，ほぼ同工異曲である。それによれば高駢が大羅城を開いた時に，東城門で仙人が出現するのをみた。人を求めて祈禱したが，その正体は不明であった。夜になると，仙人が夢枕にたち，自分は龍度王気である，疑うなかれと告げた。しかし，高駢は祠（あるいは法壇）を設け，その神の形状を像とし，銅鉄をもって符となし，これを圧鎮せんとした。すると忽然と激しい風雨がおこり，祠を壊し，地を掘って符を地中より引き出し，砕いて灰燼に帰せしめた。高駢はこれをみて怒り，われ北に帰るべきを知るといったという。

これらの伝承にあって，ハノイの土地神は，中国人支配者にとってあくまで異郷の霊異であって鎮圧すべき対象として扱われている。しかも土地神の霊力は，中国人支配者の霊力を上回っていたと解釈されている。[9] 他方，昇龍城を築営した独立ベトナムの支配者にとって，この土地神はどのようなものとして扱われているのであろうか。

『越甸幽靈集』の「保國」と『嶺南摭怪

廉二懸」とあって，「竜度」県の名前がみえている。ただし『大南一統志』「河内省：建置沿革；山西省：建置沿革」の古名には，慈廉の名前は記されているが，竜（龍）度は見出し得ない。

6) ここに依拠した『嶺南摭怪傳』のうち，サイゴン出版の越語対訳版には，目次に「蘇瀝江傳」の項目があるものの，本文には題字が欠けていて，「南詔傳」の後半部分にいれられている。ただしハノイ出版の越訳版は，独立した一項として扱っている。なお『大南一統志』[河内省：山川蘇瀝江]には，この『嶺南摭怪傳』の内容が部分的に引用されている。

7) 李元嘉のことであろう。本稿105ページ参照。

8) ベトナムにおける呪術信仰の史的素描は，グェン・カック・カム [1974] を参照。なお高駢自身も，ベトナムの伝承においては，卓越した呪術者であったと信じられている [同上論文：118]。

9) Yamamoto [1970：92] をも参照。なお，高駢に関しての本稿と対照的な評価は Taylor [1976：153-155，174]。

傳』の「龍度王氣傳」とには，李太祖との折衝についてほぼ同一内容の記事が載っている。いま前者によれば，李太祖が遷都した時に翁が夢枕にたった。翁が再拝稽首し万歳を称賀するので，帝はこれを怪しみ姓名を問うと，翁はそのゆえんを詳らかに奏した。帝は笑って「尊神は100年香火を保てるのか」と問うた。翁が答えるに，「皇図が盤泰であり，聖寿が無強であり，内朝と外郡が泰和であることを願っております。臣は100年香火を保つのみではありません」と述べた。目ざめた皇帝は，この神を「國都昇龍城隍大王」に封じた。また居民が祈禱盟誓すると，たちどころにその霊験があらたかになったという。

唐代の中国人支配者は土地神を鎮圧の対象とみなし，それが夢枕にたったのに無視した。李太祖は，夢枕にたった土地神の言をうけいれ，彼を守護神として遇したのである。しかもこの守護神は，李朝支配者によって祭られたのみならず，「居民」によっても信仰されていたことが，いま引用した伝承からも窺われる。

さらに『嶺南摭怪傳』の「龍度王氣傳」によれば，人々は龍度神を霊異とみなし，京師の市の畔に祠をたて，これがのちに李太祖によって城隍大王として祭られたという。また『越甸幽靈集』の「廣利」によれば，李太宗（李朝2代，ただし李太祖の誤とすべきか）がハノイに都を復建した時，東市の近くに龍度神祠があり，その霊力を知ると喜び，これを「主事神」と判断し「廣利王」に封じた。また新年に福を祈るための祭りを催すことにしたという。また『大南一統志』［河内省：祠廟］の「白馬祠」の項によれば，[10] 李太祖が昇龍に遷都した折に，城を築くとすぐに崩れてしまったので，龍肚神に祈禱することを命じた。すると白馬が祠より出で，一周してのちに祠に入って消えた。その足跡に従って城を築いたところ，崩壊がとまった。そこでこれを「昇龍城隍之神」として祭り，歴朝は「廣利白馬最靈上等神」に封じたという。これによれば，龍肚神祠は白馬祠と呼ばれていたことがわかる。[11] 白馬祠は皇城外の東方，蘇瀝江の南岸に位置している［洪德版圖：中都］。

つまり龍度（肚）神は，もともと皇城外の東市の畔にあった神祠であって，民間に信仰されていたものが，李朝に至って城隍神として宮城内の濃山にも祭られたらしいことがわかる。[12]

ハノイ城隍神は，独立ベトナムの支配者にとってその都城を守護する神であったとともに，一般庶民にとっての守護神でもあった。またこの神は，単にハノイという一都市の守護神であったにとどまらず，さらには王朝の永続と，内朝と外郡の泰和，すなわち王国の領域全体の泰平をも見守る守護神としての性格も多分に持っていた。[13] 東市の龍度王の神

10）『大南一統志』には『越甸幽靈集』よりの引用とあるが，筆者のみる限り，後者にはこれに該当する記載はないように思われる。

11）『北城地輿誌錄』［祠寺：白馬祠］にも，「奉祀竜肚神君」とある。ベトナムや中国の占星術や伝承における龍と馬との密接な関係については，松本［1933：1013-1014］，明石［1935：354-357］，山本［1941：934，942 注8］。

12）濃山の龍肚神が逆に東門外の神祠に移転（というよりはむしろ分祀）されたとみなす見解もある［Tran Quoc Vuong；Nguyen Vinh Long 1977：27］。

13）確かに，ハノイ西北 30 km の山西省「傘圓山」と，ハノイの東辺を貫流する紅河が，それぞれ山と川を代表する national gods とみなされていた［Tran Quoc Vuong；Nguyen Vinh Long 1977：19］。特に傘円山は『大南一統志』［山西省：山川］によれば，古くより「我國之鎮山」とみなされ，山頂に祠がたてられており，阮朝期に至っても「北圻之鎮山」とみなされていた。しかし，1397年陳朝末期に胡季犛が清化府への遷都を強行しようとした時に，これに反対して上書した阮汝説の言葉の中には，「今龍肚之地，傘圓之山，瀘珥之河，高深平闊。自古帝王開基立國，莫不以爲根固柢。宜依

祠には，陳光啓の題詩が掲げてあったという。その最後の2行には「願仗餘威清北寇，頓令宇宙樂昇平」[越甸幽靈集　廣利]とあったという。[14] すなわち陳朝期の宰相にして元の侵略軍と闘った功将陳光啓が，龍度神に対して，中国の侵略を排除し，天下の安泰をもたらすことを祈願したのである。[15]

中国人支配者の大羅城と李朝の昇龍城は，ともにハノイの地におかれた。しかし，その両者の間には決定的な断絶があった。そのことを説話の記述者は，ハノイの土地神に対する，それぞれの関係のあり方の相違として象徴的に語る。他方，現代のハノイの歴史学者チャン・フイ・リェウ氏は，より明確な政治的表現の中で，その点を指摘する。すなわち同氏によれば，中国人支配者の建設した城砦は，ベトナム人の反乱を鎮圧するための軍事的拠点にすぎず，そこには一般都市住民が包含されていなかったと論ずるのである[Trân Huy Liệu　1960: 15]。つまり，中国人支配者の城砦は，基本的にはベトナム民族の利害に敵対する存在であったとみなし，ベトナム独立王朝の建設した都城との性格的な相違を強調しているのである。

中国人支配者の建設した城砦に対するこのような評価は，現代のベトナム人史家のみならず，前近代期のベトナム人史家にも共通している。すなわち『大越史記全書』[外紀巻5：唐長慶四年]では，唐の都護李元嘉が824年に，「以城門有逆水，恐州人多生叛意，因移今城焉」とあって，洪水を避けるためにハノイ城の位置を移したことを記している。しかし，その洪水対策も，住民の福祉を望むためのものであったというよりは，むしろ治安対策の一環（「恐州人多生叛意」）として発想されていたとみなしているのである。また，同書の858年の項[同上書：唐太中十二年]には，交州経略都護使王式について，「有才畧，至府，樹芳木爲柵，深塹其地，泄城中水，塹外植刺竹，寇不能冒」とあって，「寇」が侵入できないように府城の防御を固めたことが特記されているのである。後藤均平氏も強調するごとく[後藤　1975: 217 以下]，ベトナムはすでに6世紀ごろから実質的な半独立状態にあり，交州刺史に任命された中国人官吏は，実際には任地の交州に足を踏みいれられない状況が恒常化していた。隋・唐期になるとその傾向はますます強まり，たまたま交州に着任し得た中国人官吏も，自分の治所を固く防御し，ベトナム人の反抗に備えねばならなかったのである。ここにおいて「城」は，中国人の植民地支配のための軍事的拠点にほかならず，城外の民と敵対的な関係にたつ。また，桜井由躬雄氏[1976: 159]の指摘するごとく，張伯儀や張舟の羅城建設，増築（本稿 100ページ）が，北西方の南詔や南方のチャンパを攻略するための前線的な城砦の確保を企図していたことにも，注目する必要があろう。

Ⅲ

独立ベトナムの諸王朝にとって，その都城

於前事」（傍点引用者）とある[大越史記全書本紀巻8：陳紀四光泰十年]。ここでは傘円山，瀘江（紅河上流），珥河（紅河本流）とともに，「龍肚之地」が並列されていることに注目したい。

14) 『嶺南摭怪傳』「龍度王氣傳」によれば「伏願餘威除北寇，頓然宇宙晏然清」。

15) なお濃山に関しては，『大南一統志』[河内省：山川]に「李太祖定都建正殿於其上，黎爲敬天殿」とあり，すでに李太祖によって山上に神殿がたてられ，のちに黎朝期に敬天殿と名づけられたことがわかる。敬天殿では皇帝が重臣たちと国事を論じたという[Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long　1977: 45]。かくして昇龍城隍神は，地中と気を通ずる霊山に祭られ，それは蘇瀝江神と龍肚神の合体したものであり，そこにたてられた神殿は敬天殿と名づけられたことになる。ここには天地山川，あるいは龍などの諸要素が渾然と存在している。

建設と経営は，独立の維持と王権の維持のための不可欠の構成要素であるとともに，その象徴でもある。都城建設においては諸宮殿の建設とともに，城壁の建設と維持が重要な意味を持つ。城壁は，外敵の攻撃を防ぎ，その城内に存在する富と住民を守り，政治権力を守るための軍事的な機能を具現する。しかし，それとともに城壁は，政治的な権威を象徴する存在でもある。安陽王の都城建設に関して『大越史記全書』[外紀巻1：蜀紀] は，「其城築畢旋崩。王患之，乃齋戒禱于天地山川神祇，再興功築之」と記している。すなわち，最初の城が築きおわったのちに崩壊してしまうと，王はこれを患い，斎戒して天地山川神祇に祈禱することによって，その再興を期したのである。城の崩壊は，物理的な現象としてのみならず，むしろ天地山川神祇の全ての霊力を総動員して守らねばならぬ王権そのものの危機を象徴してもいたであろう。また，上述の白馬祠の故事が伝えるごとく，新王朝を開いたばかりの李氏が，城を築いてもただちに崩れてしまう事態を前にして，龍肚神祠に祈禱したのも，事情は同じであろう。

政権の交代は，時として首都そのものの変更を伴う。胡季犛がその政権簒奪に際して，事前に首都を清化府に遷することを強行した事情は，上に述べた。また1802年，短命な西山政権を打ち破って阮朝を創始した嘉隆帝は，昇龍城を捨てて，阮氏の根拠地たる富春，すなわちフエ（Huê）に都をおいた [Phan Thuận An 1973; Phan Tương 1978]。阮朝が，かつての帝都ハノイに対してとった措置は，都城そのもの，とりわけその城壁の持つ象徴的な意味を，みごとに証明していると思われる。

すなわち嘉隆帝は，即位間もなく従来のハノイ城すなわち昇龍城の改築を命じている。[16] ヴォーバン式（Vauban）の城砦として完成した新城は，その名前を昇龍城から昇隆城に改められた。[17] ベトナム人史家は昇龍城改築の意味を，従来のハノイ城が広大にすぎたためにこれを破壊し，これにかえて，阮朝の新都フエよりも小規模のものに作りかえることにあったと説明している。[18] また昇隆城への改称についても（龍と隆とはベトナム語で同音），皇帝を象徴する龍の字をハノイに冠することを避けるためのものであったと評価する [Hoàng Đạo Thúy 1974: 11; Trần Huy Liệu 1960: 81; Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977: 53]。そもそも1010年に李太祖が昇龍の名をハノイに冠した由来は，「秋七月，帝自華閭城，徙都于京府大羅城。暫泊城下，黄龍見于御舟。因改其城，曰昇龍城」[大越史記全書　本紀巻2：李紀一庚戌順天元年]，「初王以華閭城湫隘，

16) 『大南寔錄正編第一紀』嘉隆2年（1803年）春正月［巻20：4］に「築昇龍城」とあり，『國史遺編』［嘉隆朝］癸亥2年（1803年）8月には「改築昇龍城 甲子夏起功乙丑秋成功」とある。これによれば，1803年に改築の命令が出され，1804年（甲子）に着工，1805年（乙丑）に完成したことになる。『大南一統志』［河内省：城池］によれば，河内省城は嘉隆3年（1804年）に廷臣が「改修」を「奏請」し，4年（1805年）に「命官督築」とあって，前述の記載とは1年ずつ食い違う。

17) 『國史遺編』［嘉隆朝］の項（注16参照）には，「三年事完，建石碑于旗柱下，仍改昇龍曰昇隆，取昇平隆盛之義也」とあり，改称を嘉隆3年（1804年）のこととするが，他方『大南寔錄正編第一紀』では嘉隆4年（1805年）8月［巻27：7］の項に「改昇龍城爲昇隆城」とあり，やはり1年ずれている。ベトナム人史家は後者の記載に従っている。

18) ただし，『大南寔錄正編第一紀』嘉隆2年春正月の項［巻20：5］には，前述（注16）の記載に続けて「帝以城制窄狹欲加寬廣」とあり，これとは逆のことを改築の理由としてあげている。しかしながら，ベトナム人史家の考証によれば，黎朝期の皇城の囲む地域の面積は，李・陳朝期の皇城の2倍，阮朝期の河内省城の3倍であったといい [Trần Huy Liệu 1960: 58]，以上の嘉隆帝の言は事実と反していることとなる。

乃遷都大羅城，初遷時泊舟城下，黄龍見於御舶，因號昇龍」[越史略　巻2：阮紀太祖庚戌] とあるように，遷都時に黄龍がたち昇るのを帝がみたことに始まる。龍は古くよりベトナムにおいても王権を象徴するものであって [山本　1939; 1941]，上にみた李太祖にまつわるエピソードも，ハノイが新たな帝都たることを黄龍の存在によって象徴的に示したものにほかならない。阮朝の創始者がハノイの城名から龍の1字を抜いた意味は，したがって上述のベトナム人史家の解釈に従うのを妥当とすべきであろう。

さらに阮朝の嘉隆帝の後継者明命は，1835年に河内省城（すなわち昇隆城）が，朝廷の定めた規格に比して高すぎるゆえをもって，その削減を命じている。ベトナム人史家は，これを昇隆城がフエの城壁よりも高かったから，それを是正するための措置であったと強調する [Trần Huy Liệu　1960: 82]。[19]

これら一連の事件は，阮朝の新政権が，ハノイにはすでに皇帝が存在せず，かつ帝国の中心がフエに移動したことを，意味論的にも（昇隆城への改称），あるいは物理的にも（改築→規模縮小，城壁の高さの削減），具体化せんとする意思を明白に示したものにほかならない。

都城が支配者の意図を体現し，その権威を象徴するものである以上，政治権力の移行は，また時として都城の外観や王宮の配置の変化をももたらす。黎朝（1428-1789年）は，16世紀はじめに莫氏の一時的な簒奪にあってから衰退し，その実権は北部ベトナムのハノイに根拠をおく鄭氏と，中部のフエに本拠をおく阮氏の手に移った。ハノイ＝昇龍は，名目化した黎朝の帝都として存続するが，ベトナム北部における政治的実権が鄭氏に移行した事実は，ハノイ城の外観にも変化をもたらした。すなわち，1599年鄭氏は，ハノイの皇城外の南方に王府を開いたが，自分の王府がハノイの中心に位置することを明示するために，王府の東にあるグォム（Gươm）湖を左望湖，西にあるトゥイクァン（Thủy Quân）湖を右望湖と称した。また，王府およびその周辺には各種の建築物が整備されていったのに対して，黎朝皇帝の宮城は荒廃するにまかせられたのである [Hoàng Đạo Thúy　1974: 10-11; Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long　1977: 41-43]。

Ⅳ

上にみてきたように，都城におけるその城壁の存在は，支配者の政治的権威を象徴する。城壁の維持は，ベトナムの政治的独立と王権の存続を象徴する。また，皇帝の住まう首都の城壁は，国内のいかなる都市の城壁よりも高くそびえたち壮大でなければならない。

だが，それとともに城壁は，政治権力者の被統治者に対する態度をも象徴する。皇城を囲繞する城壁は，その存在によって，世界を内外に分断し，被統治者の世界から，城壁内の皇帝の生活圏と政治・儀礼のセンターを切り離す。城壁は，かくして外部世界との隔絶

19）『大南一統志』[河内省：城池] に，明命16年（1835年）「城身過高，量減一尺八寸」とある。また『大南寔錄正編第二紀』明命16年春3月 [巻146：22] の項にも，「改修河内省城令省臣雇撥兵民刪減如式以符定制 原城身高一丈三尺改爲高一丈一尺二寸」とあり，ハノイ城が規格よりも高すぎたゆえをもって，それを削減したことが記されている。ただし，削減前のハノイ城がフエのそれより高かったか否かに関しては，いま少し検討の余地がある。すなわち嘉隆年間に建設されたフエの宮城は高さ9尺2寸，皇城は1丈5尺であって [大南寔錄正編第一紀　巻24：1]，皇城の高さは河内省城の削減以前のそれをすでにしのいでいる。他方『大南一統志』[京師：城池] によれば，皇城は高さ1丈5寸であって，これは削減後の河内省城の高さにも及ばない。

を象徴し，また時として外部世界との顕在的・潜在的な敵対を象徴する。だが，それはコインの一面にすぎない。他方において城壁は，その4面に門が設けられていることによって，内外の交通がそもそもの最初から前提とされているのである。城壁の存在は，その内部空間の完全な閉鎖性と排他性と自己完結性を決して意味しない。ただ外部との交通が，城壁内の権力者の意図と統制に服するだけである。城門の開閉が城内の人間の意思によって決定されるように。

ハノイ＝昇龍城は，三重の城壁に囲繞されていた。一番内部は宮城と呼ばれた。ここは皇帝および宮女の生活圏であり，皇帝の政治的・儀礼的活動のセンターであった。その外側に皇城があって，諸官衙がたち並んでいる [Trần Huy Liệu 1960: 23ff.; Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977: 21ff.]。昇龍城は唐代長安の制にならったものの，皇城は長安のごとく規則正しい長方形をしておらず，東西に細長い不整形をしている [桜井 1976: 159]。また，長安にあっては皇城と宮城が南北に並列する形となっているが,[20] 昇龍城においては京城が皇城の中に包含される形となっている。昇龍の皇城の城壁は最初土塁であったが，のちに煉瓦とされ，さらに外側に水濠が掘られ，それは蘇瀝江に通じていた [Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977: 21; Vietnamese Studies 1977: 67-68]。皇城には東西南北に4門が設けられており，それぞれの門外には，市が設けられていた [Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977: 22, 26; Vietnamese Studies 1977: 66]。皇城の門外に出ると，そこには一般庶民が生活し，生産活動を営み，商業活動に従事する空間が広がっている。この空間は京城と呼ばれ，その周囲には土塁が築かれていた。それはハノイの町を洪水から守る堤防としての機能を持っていた。京城の土塁は上述したごとく（本稿 101ページ）1014年にはじめて建設され，その後いくたびかの補強がなされた。総延長は 30 km 以上，高さは7～8 m に及ぶところもあり，最頂部での幅は 10 m 以上あって，馬車の通行も可能であったという [Trần Huy Liệu 1960: 23ff.; Tran Quoc Vuong; Nguyen Vinh Long 1977: 19-20; Vietnamese Studies 1977: 67-68]。

ハノイにおける皇城とその外部の京城との対比は，陳荊和氏の次のことばによって明解に要約されている。同氏は，17世紀のヨーロッパ人来訪者の観察に基づきつつ，ハノイがふたつの区画に截然とわかれていたと結論づける。ひとつは城壁を巡らした王宮，すなわち黎朝の皇帝と実際の政治権力を掌握していた鄭氏の諸官庁の区域であり，正式に「昇竜」または「東京（トンキン）」と呼ばれた部分である。他方は王宮の東辺にある無数の貧弱な家屋の聚落であり，俗名を Kẻ Chợ と呼び，その周囲には城壁が設けられていなかった [陳 1970: 4-5]。[21] Kẻ Chợ は王宮の東側，蘇瀝江の両岸沿いに紅河畔まで続いていた街区であるとみなされるが，この周囲を巡っていたはずの京城の外観が堤防であったために，17世紀の外国の観察者たちはそれを城壁とみなさなかったのであろうか。Kẻ Chợ の kẻ

20) 唐の長安城については，佐藤 [1971]，西嶋 [1981: 137 以下]，宮崎 [1962] などを参照されたい。

21) ウッドサイド氏 [Woodside 1971: 127] は，阮朝期のフエに関して，支配者が中国式の壮厳さの模倣を心掛けたにもかかわらず，その模倣は，non-bureaucratic な庶民にとっては無縁なものであったとして，以下のごとく結論している。"The Sino-Vietnamese imperial dream coexisted uneasily with the Southeast Asian market town." 本稿で以下に検討するように，thành と thị との複合としてベトナムの「まち」を位置づける際，ウッドサイド氏のこのような視点も勘案する必要があろう。

は集落の意であり［同上論文：2-3］，chợ は市場の意である。

ハノイのまちを，城壁に囲まれた王宮と，城壁に囲まれていない Kẻ Chợ との，ふたつの質的に異なった空間の並存として捉える，このような議論は，グェン・ティン・ニャー氏の次のような議論と対応して興味深い。ニャー氏は，ベトナムの都市の特徴を，thành-thị というベトナム語の中に象徴的に示されていると論ずる。Thành は「城」であって，「防備を施された囲いによって構成される本元的な核」に相当し，thị は「市」であって，それは「もうひとつの基礎細胞にあたる」［Nguyen Thanh Nha 1970: 120］。Thành-thị（城市）は，いうまでもなく漢越語であって，中国においてもともと城壁に囲まれた都市を意味する語として用いられていた［大室 1981: 4; 諸橋 1976: 183］。ほかに現代ベトナム語には都市を示す語として thành-phố がある。これもふたつの漢越字の組合せであって，「城舗（鋪）」となるであろう。この表現方法は，あるいはベトナム人の創意工夫になる漢越語であったかもしれない。

いまはこれ以上の詮索はおくとして，ここで注目すべきなのは，ベトナム人が「まち」を，thành という言葉に体現される政治的な機能を第一義とするものと，thị ないしは phố という経済的な機能を第一義とするものの合成として，観念しているらしいことである。

あるいは言葉をかえていえば，都市は「城」の建設に端的に示されるごとく，政治権力者の意思が体現されており，また城壁によって堅固に防備されることを常とする行政と儀礼のセンターを中核に持つ。しかし，それと同時に，都市は「市」ないしは「舗」（鋪）の存在に象徴されるがごとき，民衆全体の経済活動，生産活動を包含する存在としてある。

このような考察を，先にあげた陳荊和氏の指摘と勘案することは，きわめて興味深い。ハノイは，城壁に囲まれた王宮と，Kẻ Chợ すなわち市場の区域とによって構成されているのである。阮朝期のフエの外観に関しても同様のことがいえそうである。フエは，宮城（禁城）を中心に，その外側に皇城，さらにその外側に京城が築かれ，京城の部分がヴォーバン式の城砦をなしている［大南一統志　京師：巻頭地図］。宮城は皇帝および妾妃の生活圏であり，皇城は皇帝による政治と儀礼のセンターであり，京城には諸官衙が設けられていた。京城の規模は小さく，唐の長安や昇龍時代のハノイのごとく京城内に大市街区域が発展したわけではない。しかも，京城自体がもっぱら官衙のための空間として用いられているのである［同上書：城池］。京城には一般庶民のたちいりが許され［Bửu Kế 1967: 9］，また若干の市も設けられていたようではあるが，[22] フエの場合，庶民の居住区や市舗街は，むしろ城外に発展していった。『大南一統志』［承天府：舗市］をみると嘉会舗，東嘉舗，東会舗，営市舗，東門舗，場銭舗，東嘉市が，京城外の東ないしは東南に設けられていたことがわかる。つまり，ここでもフエは，京城・皇城・宮城というもっぱら政治的機能を営む区域と，その城外の市ないしは舗の集合体とに二分されている。

これは帝都フエに限らず，阮朝期の他の大都市にも妥当すると思われる。例えば南定（Nam Định）の場合，ヴォーバン式の城砦の外側に市街地の発展していることが，アガール氏の地図より看取される［Agard 1935:

22）『大南一統志』［京師：寺觀富春社亭］に「在京城内先農壇之北，舊富春社民構立祀社内靈神。本朝嘉隆初築京城，闢入城内許民仍（仍か）舊奉事毎年六月祈安禮，官給之錢。（中略）亭之西有市，舊名富春市，明命年間改爲西祿市，今廢」とある。

267]。

つまりベトナムにおける「まち」は，(1)堅固な城壁（と水濠）に防備された政治・儀礼センターと，(2)庶民の生活圏，経済圏とに截然と区分されており，しかも両者が一対となって「まち」を構成しているのである。[23]

都市の第2の区域，すなわち一般庶民の生活圏，経済活動圏は，一方において国家権力の統制と整序の対象とされる。ハノイの Kẻ Chợ は，坊（phường）と呼ばれる区域と，庸（舖）（phố）と呼ばれる街路よりなっていた。[24] 李・陳朝期の坊に関しては，『大越史記全書』[本紀巻5：陳紀一建中六年] に「定京城左右伴坊，倣前代爲六十一坊，置評泊司」とあり，これより李・陳朝期を通じて坊の数が61あり，坊は政府によって設定され，その監督官庁として評泊司のおかれたことが判明する [陳　1970: 7]。坊の数は黎朝期になると36となった[25]が [同上論文: 7-8; Trần Huy Liệu　1960: 63]，この時期の行政制度をみると，京師の区域は奉天府と呼ばれ，その長官は府尹と呼ばれた。府は蘇瀝江以南の寿昌県と以北の広徳県にわかれ，[26] それぞれに坊が18ずつおかれた。各坊には坊長がおかれた。また16世紀末には総（tổng）の制度が導入され，寿昌県には八つの総がおかれた [*ibid.*: 63-64; Vietnamese Studies 1977: 69]。このようにして，坊は国家権力によって設定され，また首都における行政組織の下層に組み込まれたわけである。また，前述のごとく李朝初期には「西街市を創立した」ともあり，国家権力がハノイにおける経済活動を積極的に統制，整序しようとしていたことが窺える。確かに，都市における手工業や商業の発展は，国家ないしは王侯貴族と

23) 無論ベトナムにおいても，行政・儀礼センターとしての機能を持たない，純粋の商業都市の存在が，全くみられないわけではない。17～18世紀の政治・経済を分析した著書の中でグェン・タィン・ニャー氏は，首都や省都など行政的中心地に発展した都市を villes-citadelles と呼び，これとは項目を別にして villes-marchés の存在していたことを指摘する [Nguyen Thanh Nha　1970: 120ff.]。後者は経済的な発展を基礎として「自発的」に形成されたものであり，ちょうど中国における「市鎮」に相当する [*ibid.*: 124]。しかし，ベトナムに発展した「市鎮」としてあげられているのは，中部ベトナムの会安，南部の河僊，北部の舖憲，雲屯などであって [*ibid.*: 122-126]，要するに華僑の「まち」ないしは国際交易のための商港としての性格が強い。ただし，このことは，ベトナムにおいて自然発生的な国内交易の発展が，行政的・政治的な性格からは自立した独自の「まち」を形成する程度までには至っていなかった，ということを示すと結論づけるべきではないであろう。そう解釈するよりも，むしろウッドサイド氏の指摘するごとく，ベトナムは中国に比べてはるかに領土が狭いにもかかわらず，行政的には中国にならったために，中国に比して地方の末端レベルに至るまでの行政的コントロールの浸透度が高かった [Woodside　1971: Ch. 3] がゆえに，自然発生的な商業都市が商業都市のままで存続し得る余地が少なかったと解すべきなのではなかろうか。

24) 例えば Đông Thành 坊の場合，それはさらに hàng Đồng（銅），hàng Vải（布），hàng Bút（筆），hàng Phèn（みょうばん）の各庸，および Đông Thành 市場（chợ）を有する Đông Thành 村（thôn）より構成されていた [Lê Văn Lan　1977: 200]。

25) 陳荊和氏 [1970: 7] は，「坊」は「勿論中国における古来の用法と同じく，京師の区画の単位」であるとするが，「坊」が一般村落名に用いられる用例は，ベトナムにはかなりあったようである [桜井　1975]。また，ベトナムの研究者は，坊や庸（舖）が首都の昇龍以外の都市にも用いられたと指摘する [Lê Văn Lan 1977: 199; Vietnamese Studies　1977: 69]。なお彼らは，村落内に商人や手工業者の同業組織たる坊会（phường hội）が存在したことを指摘している [Lê Văn Lan　1977: 199; Phạm Văn Kính　1977: 227-228] が，都市の「坊」とこれら農村の「坊会」の間には，語源的に何らかの関連があるのであろうか。

26) 東西に貫流する蘇瀝江によって，2県が南北に二分されていることは，『洪德版圖』[中都] によって窺われる。桜井氏 [1976: 160] は，蘇瀝江が唐長安の朱雀大街にみたてられていたと論ずる。

いった政治権力者の意思と必要性に対応する側面を持つ。

だが，都市における経済的機能を，一義的に国家権力の創造物であるとみなすことは，妥当ではないであろう。

陳荊和氏 [1970: 5-6] は，17世紀英国商人の記述に基づきつつ，「Kẻ-chợ が数多の商区から成立っており，各商区別に異なった商品を扱っていること」，「各商区がそれぞれ，一つ又は若干の村落に専属し」，「特定村落の住民のみが，その商区で店を出す権利を保有している」ことを指摘する。[27] ハノイの坊や舗（庸）の名称は，しばしばその区域内の住民の大部分が従事する手工業や商業に従って名づけられた [Hoàng Đạo Thúy 1974: 11, 48-49; Vietnamese Studies 1977: 69-70]。[28] またベトナム人史家は，ハノイの手工業が，農村における特定の手工業への専門化と密接に連動していたことを強調する。つまり，特定の専門技術を持つ特定の農村の出身者が上京して，ハノイの特定の手工業を営む傾向が強かった [Lê Văn Lan 1977: 195; Phạm Văn Kính 1977: 221]。これらの手工業者はハノイに永住せず，自分の出身村落と往来する流動性が高かった [Lê Văn Lan 1977: 203-204]。ハノイの庸坊は，このような出身村落との結びつきの強い人々より構成される同郷同業集団としての傾向が強かったとみなしてよいであろう。彼ら手工業者は，ハノイにそれぞれの専門技術をもたらしたとともに，その農村における生活のスタイルや文化や信仰をも持ち込んだ [*ibid.*]。[29] また，村落専業化と生産と販売の独占の傾向は，交易場所である市の発達を促し，[30] Kẻ Chợ 商区における特定村落独占権保有の現象はその反映であるとみることができる [陳 1970: 11-12]。

27) これはベトナム人研究者によっても再三引用されている [Lê Văn Lan 1977: 197; Nguyen Thanh Nha 1970: 116; Phạm Văn Kính 1977: 220]。

28) 坊の例としては Tich Ma (ma＝麻), Trích Sài (sài＝薪), Võng Thị (võng＝魚網) [Vietnamese Studies 1977: 69-70], 街媚坊（媚 vải＝反物）[陳 1970: 13] など。無論坊の全てが職業やとり扱う生産物，商品にちなんで名づけられたわけではない。江口坊，蓮池坊，報天坊などのごとく，地形や周辺の建造物にちなむ名称もあった [Trần Huy Liệu 1960: 28]。庸の例としては注24に列挙したもの以外に，hàng Đàn（弦楽器），hàng Hòm（棺），hàng Trống（打楽器），hàng Kèn（管楽器）[Hoàng Đạo Thúy 1974: 11], hàng Gai（麻），hàng Bông（綿），hàng Hài（靴），hàng Chỉ（糸）[*ibid.*: 48-49] などの各庸があった。『大南一統志』「河内省：市庸」にも，行禡，魚鹹，南（一名行笈），行蒲，金銀，鞋匠などの各庸名がみえている。なお，街路名に職業や商品の名称を冠する実例は，中世以来のハノイのみならず，少なくとも19世紀のサイゴン [Nguyen Thanh Nha 1970: 122] やナムディン [Agard 1935: 266] にもみられる。ただし，阮朝期の首都フエの坊や舗の名称に関しては，儒教的あるいは行政的な性格が顕著である。例えば，京城内の坊名には忠順，富文，仁厚，保和といった漢語が冠され [大南一統志 京師：官署]，また京城外の市舗街は第一坊，第二坊といった番号によって呼ばれていた [同上書 承天府：舗市]。また，舗名たる東会，東門などは，隣接する橋や門にちなむものであった [同所]。このことは，これらフエの市街区に対する政権の統制の強かったことを示すと解し得るかもしれない。

29) 例えば，ハノイ市内にはそれぞれの出身村落ごとの亭（đình，村の守護神を祭り，集会所を兼ねる）が設けられた [Lê Văn Lan 1977: 195, 200, 206]。またハノイの庸坊は，それぞれ周囲を生け垣に囲まれた独立した区画を形成し，その外観は「一個の比較的大きな村落」と異ならなかった [陳 1970: 7-8]。また，その家屋も農村のそれと大差はなかった [Lê Văn Lan 1977: 204-205]。

30) 市の発展を論ずるためには，またベトナムにおける貨幣経済の発展をも考察せねばならないであろう。これに関しては，本稿既出の諸文献のほかに，藤原 [1959; 1960; 1968], Trương Thị Yên [1979] などを参照されたい。

おわりに

本稿においては主として，ベトナムにおける都市について，政治権力（者）との関連において検討を加えた。第Ⅰ節においては，ベトナムの都市が，中国による植民地化の帰結としてもたらされた外在的な存在では決してないことを指摘した。第Ⅱ節においては，そのことを，中国人支配者に敵対したハノイ城隍神が，独立ベトナムの支配者によって祭られたことに象徴的に示されていると指摘した。第Ⅲ節においては，政治権力者にとっての城壁および城壁都市の象徴的な意味を検討した。そうして第Ⅳ節においては，都市が政治的機能を持つとともに，経済的機能をも持つことを指摘した。さらにその第2の経済的側面に関していえば，一面においては，政治権力の統制と整序の対象とされたとともに，他方においては，村落の自律的な経済発展の結果であり反映でもあったことを指摘した。

参考文献

『大越史記全書』（引田利章校訂　1884，埴山堂反刻）

『大南一統志』北圻（東洋文庫所蔵）

———．中圻（1941，印度支那研究会）

『大南寔錄』（慶応義塾大学言語学研究所）

『越甸幽靈集』（越語対訳版 1961，Saigon：Nhà Sách Khai-Trí；越訳版 1972，Hanoi：N. X. B. Văn Học）

『越史略』（守山閣叢書）

『北城地輿誌錄』（越語対訳版 1969，Saigon：Nha Văn Hóa）

『國史遺編』（越語対訳版 Vol. 1，1973，Saigon：Bộ Văn Hóa Giáo Dục và Thanh Niên）

『洪德版圖』（影印・越語対訳版 1962，Saigon：Bộ Quốc Gia Giáo Dục，ただし，これは東洋文庫所蔵のものを底本としている）

『嶺南摭怪傳』（越語対訳版 1961，Saigon：Nhà Sách Khai-Trí；越訳版 1972，Hanoi：N. X. B. Văn Học）

『歴朝憲章類誌』（越語対訳版 Vol. 1，1971，Saigon：Phủ Quốc Vụ Khanh Đặc Trách Văn Hóa）

Agard, Adolphe. 1935. *L'Union Indochinoise Française ou Indochine Orientale.* Hanoi：Imprimerie d'Extrême-Orient.

明石貞吉．1935．「『老獺稚伝説の安南異伝』の霊物と天文との関係に就いて」『民族学研究』1(2)：354-357.

Bửu Kế. 1967. Nhìn qua các Nghị-Lễ Triều đình Huế. *Sử Địa* 5：9-17.

陳荊和．1970．「十七世紀に於ける河内（Kẻ chợ）の様相と性格について」『史学』43(3)：1-16.

Coedès, G. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia.* Honolulu：The University Press of Hawaii.

セデス，G. 1980.『インドシナ文明史』（第2版）辛島　昇；桜井由躬雄；内田晶子(訳)．東京：みすず書房．（原著 Coedès, G. 1962. *Les Peuples de la Péninsule Indochinoise.* Paris：Dunod.）

Davidson, Jeremy. 1979. Urban Genesis in Vietnam：A Comment. In *Early Southeast Asia: Essays in Archaeology, History and Historical Geography*, edited by R. B. Smith and W. Watson, pp. 304-314. New York：Oxford University Press.

Đinh Văn Nhật. 1980a. Đất Mê Linh：Trung Tâm Chính Trị, Quân Sự và Kinh Tế của Huyện Mê Linh về Thời Hai Bà Trưng (1). *Nghiên Cứu Lịch Sử* 190：35-53.

———. 1980b. Đất Mê Linh：Trung Tâm Chính Trị, Quân Sự và Kinh Tế của Huyện Mê Linh về Thời Hai Bà Trưng (2). *Nghiên Cứu Lịch Sử* 191：35-49.

藤原利一郎．1959．「安南近世における亜鉛銭の鑄造と流通」『史窓』14：19-31.

———．1960．「阮朝治下における金銀価の問題」『史窓』17・18：35-50.

———．1968．「ヴェトナムにおける丁賦制の成立について」『田村博士頌寿東洋史論叢』田村博士退官記念事業会(編)，493-514ページ所収．京都．

後藤均平．1975．『ベトナム救国抗争史』東京：新人物往来社．

Hoàng Đạo Thúy. 1974. *Phố Phường Hà Nội Xưa.* Hanoi：Sở Văn Hóa Thông Tin Hà Nội.

———. 1976. *Đi Thăm Đất Nước.* Hanoi：N. X. B. Văn Hóa.

岩村成允．1941．『安南通史』東京：冨山房．

片倉　穣；吉沢　南．1977．「ベトナム概史」『ベトナム——自然・歴史・文化』上．アジア・アフリカ研究所（編），45-150ページ所収．東京：水曜社．

Lê Tương ; and Nguyễn Lộc. 1979. Về Kinh Đô Văn Lang. *Nghiên Cứu Lịch Sử* 185 : 31-45.

Lê Văn Lan. 1977. Ảnh Hưởng của Nông Thôn đối với các Thành Thị Phông Kiên ở Việt Nam. In *Nông Thôn Việt Nam trong Lịch Sử*, edited by Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam, Vol. 1, pp. 190-211. Hanoi : N. X. B. Khoa Học Xã Hội.

松本信広. 1933.「老獺稚伝説の安南異伝」『民俗学』5(12) : 1010-1019.

宮崎市定. 1962.「漢代の里制と唐代の坊制」『東洋史研究』21(3) : 27-50.

諸橋轍次. 1976.『大漢和辞典』(縮写版第5刷) 第3巻. 東京 : 大修館書店.

Ngô Thế Thịnh. 1979. Công Trình Thành Cổ Loa. *Nghiên Cứu Lịch Sử* 185 : 46-48.

グェン・カック・カム. 1974.「サイゴンにみる継承と展開<ベトナム>」(特集 : 都市のなかの呪術) 森 幹男 (訳).『朝日アジアレビュー』5(4) : 117-125.

Nguyen Thanh Nha. 1970. *Tableau Économique du Vietnam aux XVIIe et XVIIIe Siècles.* Paris : Éditions Cujas.

西嶋定生. 1981.『中国古代の社会と経済』東京 : 東京大学出版会.

大室幹雄. 1981.『劇場都市――古代中国の世界像』東京 : 三省堂.

Phạm Văn Kính. 1977. Thủ Công Nghiệp và Làng Xã Việt Nam. In *Nông Thôn Việt Nam trong Lịch Sử*, edited by Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam, Vol. 1, pp. 212-231. Hanoi : N. X. B. Khoa Học Xã Hội.

Phan Thuận An. 1973. Công Cuộc Kiên Trúc Phòng Thành Huế. *Nghiên Cứu Việt Nam* 1 : 136-154.

Phan Tương. 1978. Tìm Hiểu Công Cuộc Xây Dựng Thành Phú-Xuân. *Nghiên Cứu Lịch Sử* 179 : 70-77, 92.

桜井由躬雄. 1975.「ヴェトナム中世社数の研究」『東南アジア――歴史と文化』5 : 14-53.

――――. 1976.「唐代・長安の制にならう<ハノイ>」『朝日アジアレビュー』7(4) : 158-164.

――――. 1979.「雒田問題の整理――古代紅河デルタ開拓試論――」『東南アジア研究』17(1) : 3-57.

――――. 1980.「10世紀紅河デルタ開拓試論」『東南アジア研究』17(4) : 597-632.

佐藤武敏. 1971.『長安』東京 : 近藤出版社.

曽我部静雄. 1976.『中国社会経済史の研究』東京 : 吉川弘文館.

Taylor, K. 1976. The Rise of Đại Việt and the Establishment of Thăng-Long. In *Explorations in Early Southeast Asian History: The Origins of Southeast Asian Statecraft*, edited by Kenneth R. Hall and John K. Whitmore, pp. 149-191. Ann Arbor : The University of Michigan.

Trần Huy Liệu, ed. 1960. *Lịch Sử Thủ Đô Hà-Nội.* Hanoi : N. X. B. Sử Học.

Tran Quoc Vuong ; and Nguyen Vinh Long. 1977. Hanoi from Prehistory to the 19th Century. *Vietnamese Studies* 48 : 9-57.

Trương Thị Yên. 1979. Bước Đầu Tìm Hiểu về Chính Sách Thương Nghiệp của Nhà Nước Phong Kiên Việt Nam Thế Kỷ XVII-XVIII. *Nghiên Cứu Lịch Sử* 187 : 65-76.

Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam. 1971. *Lịch Sử Việt Nam.* Vol. 1. Hanoi : N. X. B. Khoa Học Xã Hội.

Vietnamese Studies. 1977. Thang Long : The City and its People. *Vietnamese Studies* 48 : 58-112.

Wheatley, Paul. 1979. Urban Genesis in Mainland South East Asia. In *Early Southeast Asia: Essays in Archaeology, History and Historical Geography*, edited by R. B. Smith and W. Watson, pp. 288-303. New York : Oxford University Press.

Woodside, Alexander. 1971. *Vietnam and the Chinese Model.* Cambridge : Harvard University Press.

山本達郎. 1939.「印度支那の建国説話」『史学会創立五十年記念東西交渉史論』上巻. 史学会(編), 261-314ページ所収. 東京 : 冨山房.

――――. 1941.「王権の本源を物語る印度支那の数種の説話に就いて」『加藤博士還暦記念東洋史集説』和田 清 (編), 925-944ページ所収. 東京 : 冨山房.

――――. 1943.「安南が独立国を形成したる過程の研究」『東洋文化研究所紀要』1 : 57-146.

Yamamoto, Tatsuro. 1970. Myths Explaining the Vicissitudes of Political Power in Ancient Vietnam. *Acta Asiatica* 18 : 70-94.